「ESD の 10 年・世界の祭典」事業化ワークショップ（第二回）

2010 年 12 月 10 日
於：東京ビッグサイト西展示棟　ルームＦ
13:30～16:30

**■実施者構成**

主催：「ESD の 10 年・世界の祭典」推進フォーラム
共催：ESD-J／立教大学 ESD 研究センター
協賛：損保ジャパン・電源開発・東京電力・日能研・三井不動産レジデンシャル・ロッテ
助成：独立行政法人環境再生保全機構（地球環境基金）

**■参加者構成**

| | |
|---|---|
| NPO/NGO/一般（RCE 関係者除く） | 20 |
| RCE | 7 |
| 官公庁 | 5 |
| 企業 | 13 |
| 広告代理店などの企業 CSR 担当 | 7 |
| 理事会関係 | 9 |
| | 61 |
| うち当日受付 | 7 |

**■プログラムの流れ**

1. 全体主旨説明（福井事務局長）　：13:30～13:45
2. 今日の流れ説明（川嶋理事）　：13:45～13:50
3. 企業の事例紹介　：13:50～14:10

（アサヒビール・損保ジャパン・電源開発・東京電力・日能研　50 音順）

4. グループ分け・会場設営・休憩　：14:10～14:30
5. ワークショップの内容説明　：14:30～14:40
6. グループでワークショップ　：14:40～15:50
7. 発表　：15:50～16:10
8. 全体でのまとめ　：16:10～16:20
9. 講評・閉会のご挨拶（廣野理事）

16:30 閉会

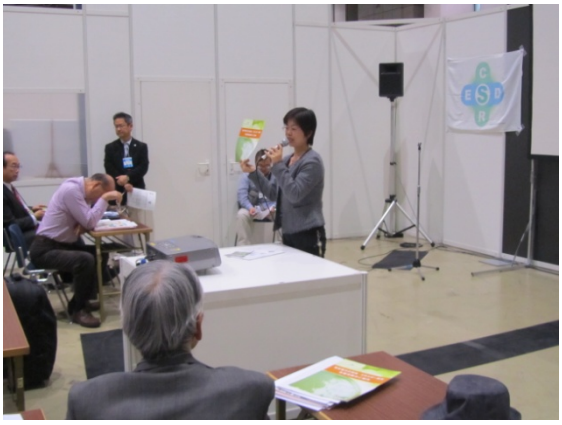
福井事務局長による趣旨説明

川嶋理事による全体の流れ解説

アサヒビール株式会社　高橋徹氏

株式会社損害保険ジャパン　市川アダム博康氏

電源開発株式会社　藤木勇光氏



東京電力株式会社　浅井あかね氏

株式会社日能研　高木幹夫氏

**各社からは、以下の内容を主体として発表が行われました。**

**・アサヒビール：若武者育成塾（http://www.asahibeer.co.jp/wij/）**

**・損害保険ジャパン：CSO ラーニング制度（http://www.sjef.org/internship/index.html）**

**・電源開発：エコ×エネ体験プロジェクト（http://www.jpower.co.jp/ecoene/）**

**・東京電力：東京電力自然学校／先生のための環境・エネルギー教育支援サイト**

**（http://www.tepco.co.jp/eco/ns/index-j.html）**

**（http://www.tepco.co.jp/eco/communication/education/index-j.html）**

**・日能研：「コンセプトブック」／環境学習教材「環境を考えるブック」など**

**■ワークショップ**

全部で 5 班に分かれて議論。基本テーマは「ESD×CSR」。

川嶋理事による趣旨説明

グループ分け

討議の様子

## 討議結果の発表

### 1. ファシリテーター：吉澤卓氏

「ESD」という言葉は堅くるしく、伝達力の弱さにつながってしまう。

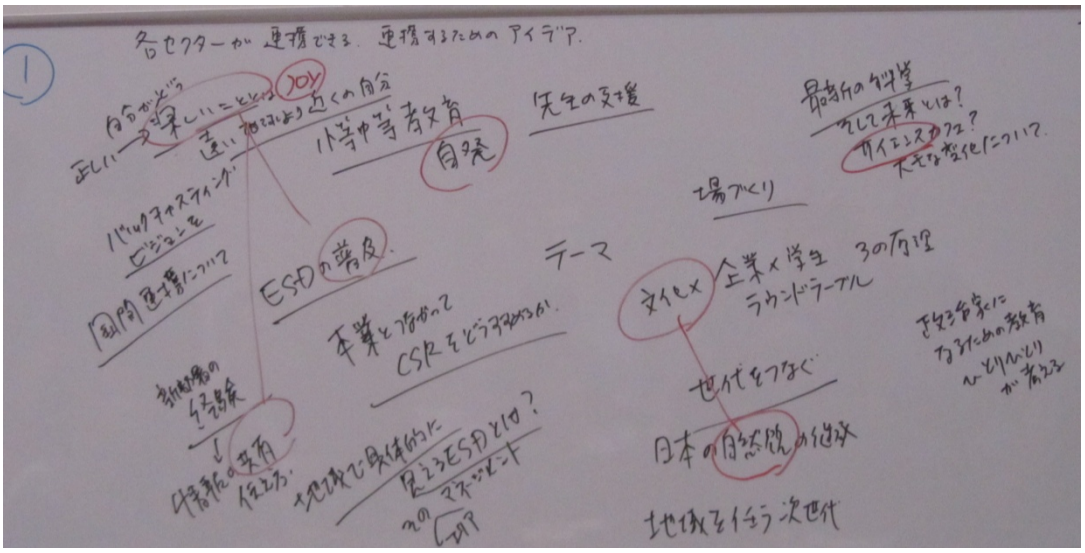
「Development／開発」を実現させるために大事にすべきは、実体験を通した「観る」力を養うことである。そのためには、〈都会〉と〈田舎〉がつながり、相互的な交流をし、つながりを持ち合うことが重要になってくる。

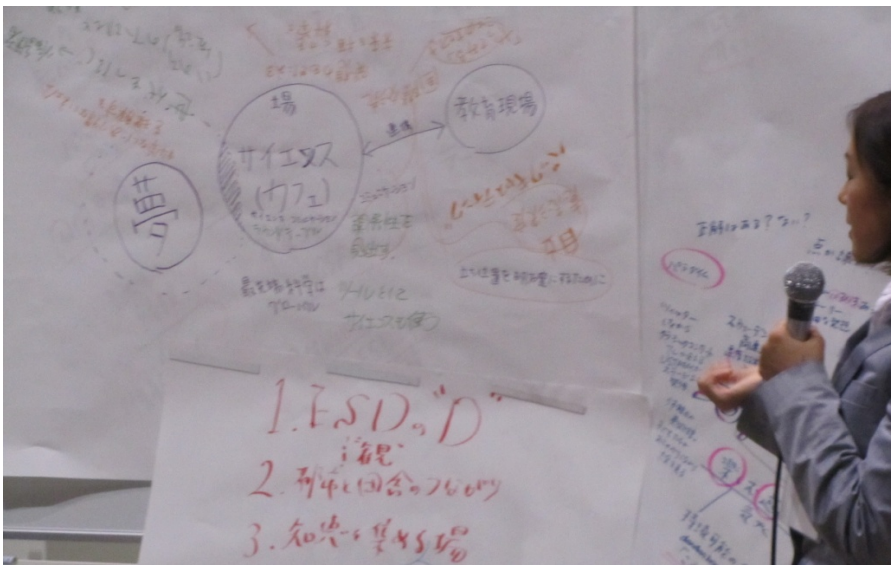
その交流の場として、神社や寺など、自ずと人々が集うようになった既存の“場所”を活用し、地域や世代を超えた“知恵”を集めて発展させ、発信してゆくことが、持続可能な社会の実現に有効になってくるだろう。

日本の自然とか文化の独自性とは何かということを考えよう。

正しいこと伝えるのではなくて楽しいことが自然に伝わるようにしよう。

正しいことを一生懸命進めるのには限界がある。誰かに自慢できたり、「いいね」と言ってもらえることが大事。2014 までにそれを完成させるのではなく、それが継続するような枠組みを作ろう。

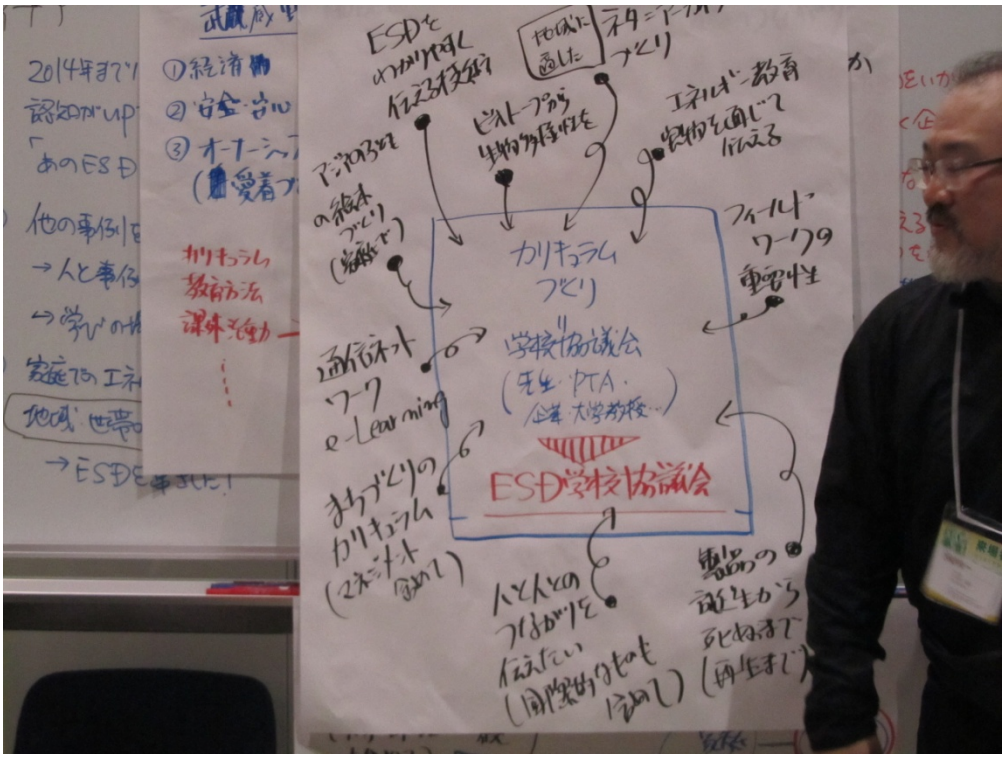





**2. ファシリテーター：中西紹一氏**

運動の推進にあって横軸がないことが問題だが、それを解決することは難しい。そこで、廣野理事から新しい「武蔵野モデル」の紹介があった。この「武蔵野モデル」では、すべての市民生活でビジョンを共有する仕組みができている。学校教育で何をするかについては、地域別の学校協議会を通じて広義のカリキュラムを市民とともにつくっていく。地域社会で大切な横のつながりは、子どもたちの教育・学習という市民にとって重要な具体的なアクションを通じて構築していくほうが早いという実例だ。

それを参考に得た結論としては、「ESD 学校協議会」などを作って、企業・学校・PTA に入ってもらう。そして、たとえばエネルギーカリキュラムをエネルギー企業が作るとか、街づくりをディベロッパーがするなどの形で参加ができるようにするというのはどうか。



**3. ファシリテーター：森一彦氏**

「ESD×CSR」として、企業と NPO、大学（教育機関）が連携して、参加するにはどうするか。（ESD は、わかりにくく認知されていないため）連携して取り組む具体的な施策への視点が提示された。

①ESD というと教育そのものを論じがちだが、教育という枠を超えた運動という認識を広める。

②ESD というと構えてしまうが、楽しく、身近なモノとして定着させる。

③企業の CSR といっても、本業から乖離した活動は持続可能性が低い。（社員の環境教育などの活動に加えて）本業に即した内容、本業に軸足を置いた内容をもって企業の ESD を作り上げていく。

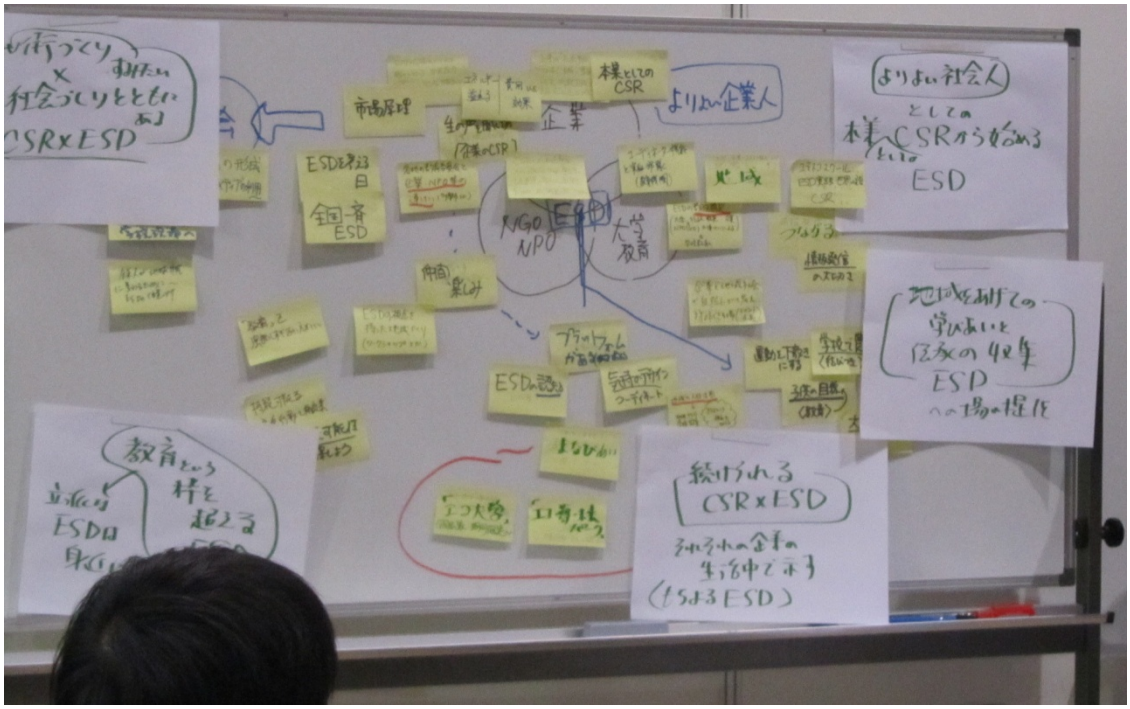
④ESD をもっと身近な生活レベルで捉えていく具体的な場づくりが必要（ESD を考える 1 日、エコ大学など）。

⑤地域では、地域の取り組み事例を収集伝承し、また、学校の活動と結び付けて情報発信する仕組みをつくる。

⑥具体的な運動を下敷きとしてそれに載せるようにして ESD を展開、個別の活動が集積することで ESD が作り上げられる。

⑦ESD は、最終的には、すみたいまちづくり、社会づくりとして展開されていく。

⑧もっともっと多様な ESD があっていい。それらはいわば「持ち寄り型 ESD」という形になろう。さまざまな ESD を 2014 年、全世界に発表する場と「世界の祭典」を展開していく。



**4. ファシリテーター：二宮兼氏**

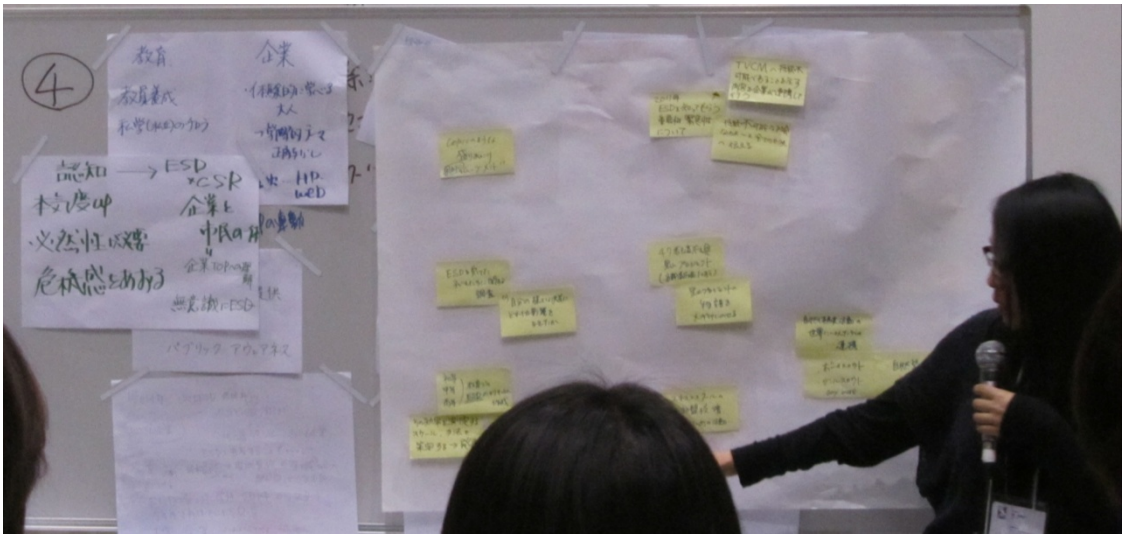
ESD を広めていく上で、人々に ESD の必然性を示す必要がある。今、なぜ ESD なのか。なぜ ESD が必要なのか。そのためにも、ESD をしないとどうなってしまうのか？という危機感をあおるアプローチが必要ではないか、それは不都合な真実と同様のアプローチで“見える化”していくことができる。

ESD×CSR を行う上で、企業がいかに乗るかがポイント。企業人も市民であり、本来は一体であり普通に行われるもののはずだが、社員が ESD を行うことが仕事になってしまうのではないか？まずは、企業のトップがよく理解し、社員にそれを求めることが大切だろう。

また、欧米では、ESD は普通のことで、浸透率が高い。ESD を習慣化し、無意識に行われる文かの高い社会を目指すべきである。

ESD を“見える化”するためには、参考例をわかりやすく多く示す必要がある。企業等の HP でそれを例示することもできるが、ESD で検索して企業の ESD ページにたどり着くのは難しい。

企業同士が連携してリンクすることや、ポータルサイトなどがあって ESD の実例が、市民に見えるような検討も必要




**5. ファシリテーター：川田すなほ氏**

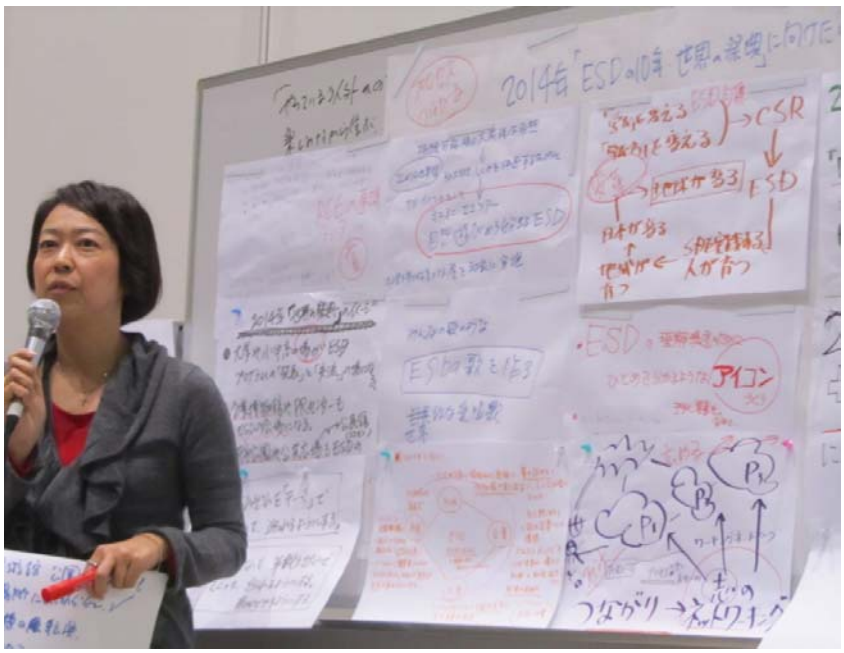
ESD 世界の祭典にむけてどのような目的を持てばいいか。プロセスを大切にし、様々な方と結びつくプロジェクトをしたい。子供が参加体験できるプログラムづくり、世界が参加できるような ESD の歌作りなど。

この中から「志のネットワーク」をつくろうということになった。当然ファンドレイジングが必要とはなるが。

すべてのステークホルダーが発表する場を作りたい。やっている人たちだけが満足するというのではだめ。

ESD という言葉を使い続けることが肝要。様々な局面で常に「ESD」という言葉やマークを使うようにしていくべき。

2014 年は通常のイベント発想ではなく、様々な空間が世界の祭典の会場になるようにしたい。




**講評（廣野良吉理事）**

ESD をテーマとした会議で、はたして人が集まるかが不安だったが杞憂だった。このようにたくさんの方がお見えになった。

今日は2014年をどう迎えるかというテーマのWSであったが、大きく3点を感想として挙げたい。

① ESD を難しく考える必要はない。自分たちがやってきたことが ESD だということでやればいい。その時に重要なのは価値観の転換・変革を促すことだ。これが ESD の根本的な合意事項である。しかし既得権を無視した社会経済構造の改革は大変に難しい。だから家庭・学校・社会教育・学習から始めることが重要だ。子供だけにかぎらず大人の教育・学習が重要だ

② そうは言っても、日本国内だけ見ても地理的経済的な環境は様々だ。まして世界に目を向けたらなおさらだ。そこで重要なのは個人・地域・文化の多様性の尊重だ。WS で改めてそれを感じた。

③ そして集団を構成する人々、地域社会に住むみんなが参加することが重要だ。「このプロジェクト、この街は私たちのもの」というオーナーシップが必要。それがないと持続可能な地域

社会の構築やプロジェクトは進まない。その根底には、人間の尊厳がある。

誰の命も尊い。それが原点になる教育が ESD であり、それを常に踏まえて行動する必要がある。私たち日本人は、多様性を尊重しつつ日本人としての独自性を出すことは大事だ。最後に、第 5 グループの意見にあったように、ＥＳＤの世界大会を日本でするときには、地域にある様々な素晴らしい舞台、例えば山村、海辺、川辺、田園、工場、事務所を活かして諸々の会議を開催してほしい。それが日本らしい ESD の発信になる。

日本人も「これはおれのやり方だ」という独自性を出してもらうことは大事だ。そのうえで多様性の理解を忘れないようにしたい。また、第 5 グループの意見に同意だ。会議をするなら地域の様々な素晴らしい地域を舞台に行ってほしい。それが日本らしい ESD の発信になる。

これらを踏まえて 2014 年を迎えるようにしたい。

以上